

## 手の行為に指腹を使わない頸椎症性脊髄症の術後患者の一症例報告 - 指腹の情報再構築・多感覚統合により手の行為の改善を目指す -

○新開谷 まゆき<sup>1)</sup>

1) 函館厚生院ななえ新病院 リハビリテーション科

### 【はじめに】

頸椎症性脊髄症は手指の巧緻性障害が特徴的でMyelopathy handと呼ばれる。今回、術後に指腹を使わず側腹つまみで、手を二次元的に使い行為を遂行する患者を担当した。比較を用い自覚を促し、指腹の情報再構築・多感覚統合に対する訓練を実施し、手の行為の改善を認めたため報告する。

### 【症例】

認知機能に問題のない60代、男性、無職。X年Y月C3-4椎弓形成術、X-5年以内に頸・胸椎部の椎弓形成術、腰椎部の拡大開窓術を施行した。X-10年に右示・中・環指を機械に挟まれ受傷した。Y+1月当院へ転院、週5回・60分・4週間治療を実施した。

### 【観察】

外部観察:両上肢に著明な可動域制限はないが右第一背側骨間筋萎縮を認めた。左上肢は使いにくいが不自由していなかった。母指対立困難で、簡易上肢機能検査(以下、STEF)は右58点(金円板・小球・ピン各1点)・左68点だった。ペットボトル開閉や書字等を観察した。右手でボトルを把持、左前腕中間位で環・小指にて蓋を挟み開閉し、書字は太柄ペンを右母・示指指間部に挟み、両行為とも指腹を使わなかった。内部観察:触・圧・重量覚情報は母指の認識が多少あるも他指は変質、各指の空間関係情報変質、右手の身体・行為表象の変質があった。

### 【病態解釈】

術後も右手の身体・行為表象が変質したまま、指腹を使わず手を二次元的に使い指腹での情報構築が変質していた。損傷前行為の表象(以下A.p)を利用し、指腹での感覚情報再構築・多感覚統合ができれば三次元的に手の行為を遂行できると推測した。

### 【治療・経過】

改善すべき行為を段階的に設定し、指腹を使ってペットボトルの蓋開閉、硬貨操作、書字の回復とした。各指や手掌による空間関係・接触・摩擦・圧情報構築訓練を実施した。訓練前に比較し学習すべきテーマを共有し、訓練後にA.pとの関連性を問い行為改善に繋げた。

### 【結果】

設定したどの行為も拙劣さは残るが指腹を使い行為が遂行可能になり、必要な各感覚情報を言語化し他行為へも波及できた。STEFは右68点(金円板2・小球1・ピン4点)に向上した。

### 【考察】

Zernitzは手の情報メカニズムの中で三次元的分析や指腹の重要性を述べている。今回、比較や訓練を介し右手の行為遂行時の指腹の役割を学習でき、指腹を使った行為が改善したと考える。

### 【倫理的配慮、説明と同意】

発表について説明し同意を得た。